

革命の旗

共産主義者同盟
(革命の旗)
中央機関紙

第32号
1981.1.20
特価 200円
(毎月5日、20日発行)

発行人 北沢 晋
発行所 赤流社
電話 (03)787-7699
東京都世田谷区千歳
郵便局 私書箱4号
振替 (東京)7-86947

定期購読料(22回分)
開封3500円(送料共)
密封4000円()

主張

今号の主な内容

- 第二新年号——女性解放の主体と差別と闘う思想とは 2~3面
- 八・一春闘を闘うために……4面
- ポーランド労働者の苦闘とわれわれの道……5面
- 寄稿・「戦後農政の歴史」……6面

被抑圧民族と連帯し 革命的な反戦闘争——安保粉砕へ！ 81春闘を闘いぬき 労働者階級の階級的統一を！



鈴木のアセアン 歴訪が意味するもの

一月八日からの鈴木のアセアン歴訪は、日帝をアジアの盟主として一層位置づけていくことを示している。

今回の歴訪で、鈴木は「アジアの人づくり」なるものを今後の東南アジア政策の中心環とすることを提案してまわったのである。このことは、これまでの帝国主義としての収奪・搾取・抑圧からの転換を意味しない。むしろ、この延長上にアジア諸国への更なる支配を強化していくことに他ならない。

すなわち、日米安保体制下での日帝の総合安保戦略として環太平洋共同防衛政策にガッチリとリンクさせていくものである。これまで、日帝は米帝の東南アジア軍事支配のもとで、資本侵出し、商品・原料市場としてきた。だが、米帝は七年ベトナムでの敗退とともに、またソ連の世界争奪への攻勢に対して、日帝・西欧帝の「西側同盟国」としての軍事的役割増大を要求し、肩がわりさせ、米帝指導下の

の帝国主義支配体制を維持することへ転換しはじめた。こうした日帝も軍備増強をはかるとともに、アジア諸国の民族解放闘争の鎮圧と、ソ社帝のアジア介入、とりわけベトナムを媒介とした侵入に対抗することを自己の使命として果すことを決意したのである。

とくに注目しなければならぬのは、インドネシア、タイの反日暴動、フィリピン人民の「買春観光」に対する批判の爆発であり、侵略企業の搾取・収奪に対する批判の爆発である。こうした反米反日民族解放闘争が七〇年代中期から高揚し、他方でソ社帝が米帝のアジアからの後退のなかで、「アジア集団安保構想」をもって積極的アジア外交をくりひろげてきていることである。

日帝は、この現実に対し帝国主義権益の防衛のため、米帝のアジア支配を積極的に肩がわりし、とくにアジアの買弁支配階級——軍事政権の「安定」と

一 集会予定

- ### 第五回全国労働者討論集会
- 右翼的労働統一に反対し
階級的労働運動のうねりを
- 期間 一月三十一日(土)〜二月一日(日)
場所 大阪中之島中央公会堂(地下鉄御堂筋線淀屋橋北口下車)
連絡先 労働情報編集委員会
- ### 一・二四総決起集会
- 三里塚空港ゼット燃料貨車輸送延長阻止
一月二十四日(土)午後五時
千葉市民会館ホール(国鉄千葉駅下車徒歩五分)



三里塚現地で旗びらき

二月千代田農協事業所移転阻止、三月燃料輸送延長阻止へ、みなぎる闘魂

一月十一日、岩山記念館において反対同盟旗びらきが行なわれました。全国から支援がかけつけ、会場は八一年新たな闘い

の熱気がみなぎりました。石橋政次委員長代行から、十五年間の闘いの原点にたちかえり団結をかため、二月農協移転、三月の暫定貨車輸送延長と闘おうとあいさつが送られ、鏡びらきとなりました。

政府公団は、資本主義体制の下で零落をしいられる農民の自立への望みにつけこみ、農民を分断しようとして成田用水基盤整備千代田事業所拡大移転など、農業政策から懐柔を持ちこみましたが、反対同盟は闘う農業建設を第一弾、第二弾とすすめ、キツパリとこれを拒絶しました。

また動労千葉は、国鉄当局の延長提案を拒否し、八、九日の総武線―首都圏の減速闘争を打ちぬき、三月延長阻止へむけてストライキの準備を進めています。

私たち東峰団結小屋は、反対同盟、動労千葉とたく連帯し、闘う農業建設、大衆の実力闘争を両輪とし、二期着工を粉砕すべく闘う決意です。

東峰団結小屋

紙代、および定期購読料改定のお知らせ

— 第33号より —

「革命の旗」読者のみなさん。日々の御奮闘に敬意を表するとともに、「革命の旗」への日頃の御援助、御協力に感謝します。昨年八〇年の激動をつうじて明らかになった八〇年代の時代基調は、今年もますます、戦争と革命の問題をわが労働者階級人民に強いると思われまふ。それは一層強く、労働者階級をプロレタリア革命の準備を急ぐことを要求しています。そのため主体的準備が、社共にかわるML主義のプロレタリア単一党創建の事業であることはいまもありません。この事業を労働者階級自らのものとするため、「革命の旗」はなお一層、全国政治新聞としての内実を深めていかねばなりません。

しかし、そのための財政的基礎は読者のみなさんの御援助にもかかわらず、必ずしも豊かなものといえないのが現状です。まして公共料金値上げ、諸物価高騰として資本主義の危機が労働人民に転化される今日、「革命の旗」月二回刊の維持と強化は、紙代価格の値上げをせざるを得ないに至っています。

わが同盟は、読者のみなさんの一層の御援助、御協力を訴えるとともに、必ずや自力更生と統合によるマルクス・レーニン主義のプロレタリア単一党創建の事業の前進でそれに応える所存です。尚、改定価格は次のとおりです。

四ページ二五〇円、六ページ二〇〇円
定期購読三回分、開封二五〇〇円、密封四〇〇〇円
(送料込み)



金物工場で働く女性労働者

女性解放の差別と闘

=24時間の女性解

ブルジョア家族制度とは

前頁よりつづ
 家族制度とは、何なのか、その社会的な意味をどう返す必要があるかと、思っています。どうですか。

C 家族からとびだしてはみても、いつのまにか自分も家庭をつくるのよ。実際、多くの労働者にとっては労働力の再生産の場として家庭がなくては生きていけない。

家族制度について問題を感じても子どもを育てていくってことになれば、たとえ共同生活って表現したとしても社会との関係では家族をつくらうことになるわけよ。たとえば戸籍制度を拒否することはできたとしても社会的には家族制度に組み込まれちゃう。この十年間い

その一番大きな問題は、労働力政策でもそうだけど女性をどうするかってことよ。

そうそう。だから必ず家庭の担い手としての女性に有利ですって法律がでてくるよ、育休とか。

巧妙なわけよ、女性の職域を広げるとか、夜間作業への進出とか、能力開発で男と平等に働けるようになるよ。これがいいものとしてうけてもらえる社会的基盤が強いよ、そこをねらって社共が支持されるよな基盤をつくらうってりこもうとしてる。

育休のねらいをみぬけなかつた社共の婦人部運動は自ら育休を要求してまね。これは社共が女性差別をどう把握しているかにかかわってると思っていますか？

社共は家族制度との関係から女性差別をとらえようとはしないのね。むしろ女性は家庭の担い手だとして前提になつて、労働者が家族を作らないうと生きていけないことの意味を逆強調してる。

そう、労働者の矛盾をすべて解消させる場しようとしてるわけよ。抑圧されてる労働者の怒りを家庭という私的領域におこめて、家庭を守るためには解消するしかないっていう、すごく腹だたいのよ。

要綱のようにブルジョア階級が家族制度の問題で、個々の家庭を方向づけてきたことはこれまでもあったんですか？

やっぱり戦前あつたみたいよ。いよいよ戦争してこたにならば、手をつけるのね。

形式は核家族であつたり三代同居であつたり時々の情勢でかわってくるんだけど、基本的にブルジョア階級の家族制度、つまりブルジョア家族制度にあるのよ。政策自体はそれのために有利なように個々の家庭をどうするかってことに重点がおかれてくる。

それを一番大きな問題は、労働力政策でもそうだけど女性をどうするかってことよ。

そうそう。だから必ず家庭の担い手としての女性に有利ですって法律がでてくるよ、育休とか。

巧妙なわけよ、女性の職域を広げるとか、夜間作業への進出とか、能力開発で男と平等に働けるようになるよ。これがいいものとしてうけてもらえる社会的基盤が強いよ、そこをねらって社共が支持されるよな基盤をつくらうってりこもうとしてる。

自分はどう生きていくのかって問題をたてる人たちがいるのよ。

A Cさんがいった点だけだと労働の婦人部ですべて解決できるかっていうとそうじゃないのよ。女性は保育や夫との関係、老人問題にしろすべてをひききけて働くわけよ。だから家族制度との闘いぬきに職場だけががんばるってことできないのよ。だから、女性の二四時間の日常的な生活領域までどう闘うのか、労働運動がこれとどきこめるかどうかまで問われちゃうのよ。

そう、団結の質はとって

それで、そこで反撃が組めなくて育休のつかつたわけよ。だから『国内行動計画』でも『要綱』でも『乳幼児法案』でもぜんぶ育休が含まれて、敵の攻撃は貫徹されてるのよ。

そうそう。女性が歴史的に生産的労働から排除されて、母親とか主婦とかいう抽象的な概念で社会的な関係から一回はずされる、そうして家事労働の担い手におとしこめられるってことをみない。

結論的には、そういう女性を中心にするってなつたブルジョア家族制度、女性差別の温床とみるかみないのかってことよ。

女性を闘うために結合することには二つの側面があると

矛盾がさくあるから逆にそれをねらって逆にするのよ。もうひとつは男性に隷属して生かされてきた歴史のうえに差別者が日常的にいてるわけよ、朝から晩までやりあつたらすくしくしんで、逃げられない関係だから決起するのが困難なんだけど、そこをがんばればすく強いものよ。

そうそう、家庭と職場の往復できりきりまわしてるとよ。それで何か始めるとよくなるのよ、男性からの文句よ。既得権を奪われちゃうとか、自分の知らない領域で動いてることも気に入らなくて。

逆い労働現場での運動は自分のめざす女性解放とはがう、だから地域で女たちがいっしょに生活して子どもを育てる中で、日常的問題を交えながら

実際の男性組合活動なんてあれでよくやれるって思うよ。そのためにはおあちやんは家で家事育児やらされてるってことよ。

外にすれば社会主義、うちに帰れば封建主義ってやつね。同笑。

だから女性差別に関して男性は具体的に、直接その場にいないはずなのよ。毎日共闘するのよ、実践もあるはずなのよ。それがどうもそうは見えてないよ。組合幹部の男

性も職場ではよくがんばりま

すね、子どもさんどうしてるんですか？

それが、日常生活の中から女性解放に連帯する質としては組みたてられてない。

性が自分の生き方として、例えば組合活動をやりたい、それは男性もやることがだから分るはずなのに分らないって。そうなるという価値感もつてのよ。こつちから問いたいよ。

B そうそう、教育とかマスコミとかでうつけられた女性観でしか見ない。

D うん、容姿とか、やさしさと、女性をある部分からしか見ないのよ。生き方まで問わない。

C 男性労働者に望むことは、まず女性差別とは何かということをはっきり理論的につかみだすこと、女性の決起をおしとどめないうこと。簡単なよ。だけどこれが難しいのよ。

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

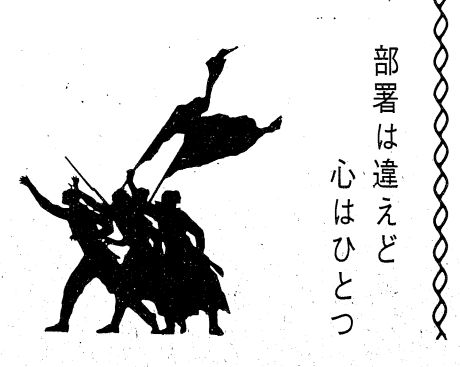
女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

女性にどうして女性解放を闘うってことは自分が生きてくことそのものなんだー

獄中3同志 元気に越冬



部署は違えど 心はひとつ

史を創造するために勝利を準備する時代です。われわれは統合をその第一歩として刻印し、八〇年全般を通して奮闘してきました。(中略) 今年はいつそいつを送ります。昨年は革命の旗を掲げ、結成の成果をうち固めたいに意気込み、大きな目標めざして万里の長征に出発した年でした。私は昨年夏に下獄して今年はいよいよ出獄の年です。獄中でついに十一回目の新年を迎えましたが、非転向で元気に闘いぬいています。八〇年代は人民が決起し、歴

新年にあたり、熱き革命のあいつを送ります。昨年は革命の旗を掲げ、結成の成果をうち固めたいに意気込み、大きな目標めざして万里の長征に出発した年でした。私は昨年夏に下獄して今年はいよいよ出獄の年です。獄中でついに十一回目の新年を迎えましたが、非転向で元気に闘いぬいています。八〇年代は人民が決起し、歴

ようか。われわれはかつて観念の肥大化の中で多くの誤まりを犯してきました。こうした主観主義ともいえるべきことは厳しく戒めねばなりません。この点、急進民主主義の総括、克服として思想的には解決してきましたが、今それを更にみながあげ、プロレタリア階級の利益にしっかりと立脚していかなければなりません。

私も春には出獄です。一刻も早く同志たちとともにスクラムを組み、闘いたいと思います。

大越 輝雄 中野刑務所

下獄から七カ月が経過しました。同志の皆さん元気ですか。私は非常に元気です。厚い獄舎の壁を貫いて同志たちの闘いの熱気は十分に伝わっています。ここ中野刑務所においても世界が戦争と革命の時代であることはひしひしと感られます。(中略) この時代はわれわれに、人民の思想と政治を創出していくことを要請しているのではないでし

八木 健彦 府中刑務所

戦争と革命の八〇年代の幕あけの年を終え、第二幕としての新年を迎えるにあたって、決意も新たに獄中より闘いのあいつを送ります。(中略) ここ府中刑務所では、韓国の革命戦士、民主人士を残酷に弾圧して前へ、更に踏み進むために奮闘しぬくでしょう。日帝打倒米帝追放、プロレタリア社会主義革命にむけて闘う熱い握手を。

「懲役囚」には、奴隷の平和が、強制労働と二四時間の監視、屈辱的政策がおしつけられています。しかし私は意気軒高として、わが党とわが労働者階級人民とともに、闘いの鼓動をもにしながら、自らの部署で自らの任務を果すべく日々を送っています。そして八一年は一層革命の旗を高く掲げ、断固として前へ、更に踏み進むために奮闘しぬくでしょう。日帝打倒米帝追放、プロレタリア社会主義革命にむけて闘う熱い握手を。

「懲役囚」には、奴隷の平和が、強制労働と二四時間の監視、屈辱的政策がおしつけられています。しかし私は意気軒高として、わが党とわが労働者階級人民とともに、闘いの鼓動をもにしながら、自らの部署で自らの任務を果すべく日々を送っています。そして八一年は一層革命の旗を高く掲げ、断固として前へ、更に踏み進むために奮闘しぬくでしょう。日帝打倒米帝追放、プロレタリア社会主義革命にむけて闘う熱い握手を。

81春闘を闘うために



賃金奴隷制廃絶と結びつけ 賃金闘争の確立を

賃金は階級支配の実態を
示すバロメーターである

日経連の「雇用か賃金か」のドウカツの前に屈服し、賃金物価悪循環論、支払能力論、生産性格内論等のブルジョアイデオロギ―をむきだしにした賃金切り下げ攻撃の前に、闘争を放棄しつづけてきた既成・民同労働運動は、すでに労働者の実質賃金をすくってきかぬ段階に至っている。そればかりか「経営参加・連合政権・ブルジョア階級独裁の擁護」を公然と掲げ、資本主義の支配体制を強化し、労働者階級を賃金奴隷制のくびきにより固固につなぎとめようとしてきている。

今、先進的労働者に問われていることは、このブルジョア階級の労働代官どもを労働運動から追放していく闘いを労働者の生活闘いにくくすることである。そのためには、資本主義批判にさらぬかれたマルクス・レーニン主義の科学的賃金理論を再度とらえかえし、発展させ、国家独占資本主義階級の賃金闘争に占める意義を厳格に踏まえ、賃金を通過し形成される労働者の意識と組織をうちたててゆくことである。資本の先行した剰余労働の強取奪、すなわち賃金制度の諸結果に対抗する労働者階級の賃金闘争を、労働者階級の終局的解放「賃金制度の廃止」をめざした革命闘争のデモとして組織していくことである。

市場価格の変動などが、まずもって先に変化したために必然的におこってくる結果としておこされるものでしかない。一言でいえば、それは資本が先だつておこなった行動にたいする労働者の反対行動としてなされるにすぎない。賃上げ闘争をこれらすべての事情から切りはなしてとりあつかひ、賃金の変化だけを見てもそれをおこさせる他のすべての変化を見おとすならば、諸君はまちがった前提から出発してまちがった結論に達することになる(賃金・価格・利潤)という、マルクスの命題は、賃上げ闘争は一〇〇回のうち九九回まで、一定の労働力の価値を維持しようとする努力にすぎないこと。自分自身を商品として売らなければならないという状態、この賃金制度が資本主義生産関係から必然的に生み出されること。その意味で賃金は、賃金制度を前提とした闘いであるにしても、賃上げを闘わなければならないというこの労働者の社会的階級的位置が、資本主義生産様式の根底的批判へとつぎすすみ、労働と所有の分離を、生産手段・生活源泉を資本家階級から収奪し、社会的共有制へ転化させることによつて克服するプロレタリア社会主義革命へと、労働者階級を組織する重要な要求であることを鮮明にさせることである。

マルクスの資本主義批判を深化発展させ、独占階級の支配する帝国主義階級の経済的基礎・政治的諸特質を根底的に批判しぬいた、レーニンの革命的理論をしっかりとふまえ、独占の国家独占資本主義への成長転化の現段階における、賃金闘争の歴史的・階級的意義を鮮明につかみださねばならない。

レーニンは帝国主義を次のように総括している。帝国主義は、資本主義一般の基本的諸特質の発展および直接の連続として生じた。この過程で経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとつてかわつたことである。：独占は、自由競争から生長しながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえにこれと共存して存在し、そのことによつて幾多のうちに先鋭で激しい矛盾、あつて、衝突を生みだす。独占は資本主義からより高度の制度への過渡である。」(帝国主義論)

独占の内部および独占階級の競争が基礎となり、独占階級と非独占階級との競争は前者の後に對する従属的支配と収奪的競争という性格をもつていたり、独占階級は、社会的剰余価値の総量の中から、支出資本量に比例した平均利潤ではなく、独占力によつてそれよりはるかに超過した独占的高利潤をひきだす。部門間の利潤率の不均衡を構造化するのである。独占的超過利潤を求め、独占階級相互間の巨大な規模での無政府競争の展開は、資源争奪、市場争奪戦へと向い、生産過程における直接的搾取の強化、不払労働の強取奪が極限にまでおし進められるのである。

搾取と賃金制度の本質

マルクスは、資本主義生産関係が賃金奴隷制であること、その本質が不払い労働を剰余労働として収奪する搾取関係にあることを資本主義批判として根本的に解明した。

資本家は、労働者の労働力を、それが商品として市場でもっている価値どりに買う場合でも、支払ったよりも多くの価値をこの労働力から取りだすこと。この不払い労働の搾取関係こそ「資本主義的生産つまり賃金制度」の基礎であり、労働者を労働者として、資本家を資本家

としてたえず再生産する結果をもたらさざるをえないこと。この資本主義生産関係の秘密を「資本は賃労働を前提とし、賃労働は資本を前提する。両者はたがいに制約しあふ。両者はたがいに生みだしあふ」賃労働と資本の関係として、それをつらぬく価値法則を説明することによつて解きあかしたのである。

したがって、マルクスの賃金理論は、価値とともに剰余価値が形成され、その剰余価値が資本家間の商品交換関係を媒介として利潤に転化する関係を明らかにした。「資本論」へと編みあげられた資本主義生産関係の運動法則の科学的解明を資本の本質的要因である賃労働の側面から考察するものである。かかる意味においてマルクスの賃金理論、賃労働の運動法則の分析は、資本主義生産関係の運動法則の解明の一環として明確に位置づけられているのである。

すなわち、賃金の本質は、資本の不可欠の構成部分として労働力の価値規定とあらわかにされ、この労働力の価値の賃金形態への転化にこそ資本主義的搾取関係の隠微の本質の解明、資本による賃労働の搾取の強化、その現実的諸形態の分析、等々が原則的資本主義批判として展開されているのである。

「労働者の一日の労働のうち、支払われるのはその一部分だけで、他の部分は不払・剰余の労働こそ、まさに剰余価値の元本をなすものであるにもかかわらず、まるで総労働が支払をうけた労働であるかのようにみえる。」というマルクスの簡潔な賃金理論の総括は、労働力の価値規定、その価格への転形としての賃金形態が、搾取関係の本質をおお

いなくすものであること。また、利潤・利息・地代等は生産手段を所有する搾取階級への剰余価値の分配の形態であつて、その唯一の元本は、商品の総価値のうち労働者の不払労働以外の他のなものでもないこと。したがって、賃金は利潤と対極関係にあることを根底的に明らかにしたのである。

それ故、賃金は、一方の側は利潤をお金をためるためにたえず買ひ、他方の側は暮しをたてるためにたえず売るといふ、資本主義生産関係「賃金奴隷制」の表現であること。この社会的搾取関係の歴史的根拠が、「労働する人間と彼の労働手段との原結合の解体」すなわち、生産手段の資本主義的所有にもとづく労働と所有との分離にあることを科学的に明らかにしたのである。更に、この「原結合」を回復する主體的・客観的諸条件が、資本主義の体内に必然的に形成されること。すなわち資本主義的所有と生産の社会化の矛盾を、資本家階級から生産手段を収奪し、社会の共有に移すことによつて解決する、社会主義革命の諸条件が生みだされることを、科学的に明らかにしたのである。

独占階級における労働者の絶対的相対的窮乏化

剰余価値による資本主義的生産関係の秘密を科学的に解明した「資本論」にもとづくマルクス賃金理論の革命的観点をしっかりとらえ、ブルジョアの・小ブルジョアの賃金闘争の階級の本質を暴露し、賃金を労働者階級の武器へときたえ、いくこと、これがわれわれの任務である。

経済主義者の賃金理論を徹底して批判せよ

第一に、「賃上げ闘争は、たんにそれに先だつ諸変化の跡を追うものによつて、しかも生産額、労働の生産力、労働の価値、貨幣の価値、搾取される労働の長さまたは強度、需要供給の変動に左右される。第二に、賃金物価悪循環論、支払能力

マルクスの資本主義批判を深化発展させ、独占階級の支配する帝国主義階級の経済的基礎・政治的諸特質を根底的に批判しぬいた、レーニンの革命的理論をしっかりとふまえ、独占の国家独占資本主義への成長転化の現段階における、賃金闘争の歴史的・階級的意義を鮮明につかみださねばならない。

レーニンは帝国主義を次のように総括している。帝国主義は、資本主義一般の基本的諸特質の発展および直接の連続として生じた。この過程で経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとつてかわつたことである。：独占は、自由競争から生長しながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえにこれと共存して存在し、そのことによつて幾多のうちに先鋭で激しい矛盾、あつて、衝突を生みだす。独占は資本主義からより高度の制度への過渡である。」(帝国主義論)

独占の内部および独占階級の競争が基礎となり、独占階級と非独占階級との競争は前者の後に對する従属的支配と収奪的競争という性格をもつていたり、独占階級は、社会的剰余価値の総量の中から、支出資本量に比例した平均利潤ではなく、独占力によつてそれよりはるかに超過した独占的高利潤をひきだす。部門間の利潤率の不均衡を構造化するのである。独占的超過利潤を求め、独占階級相互間の巨大な規模での無政府競争の展開は、資源争奪、市場争奪戦へと向い、生産過程における直接的搾取の強化、不払労働の強取奪が極限にまでおし進められるのである。

更に、帝国主義に固有の腐朽性・寄生性の必然的展開は、体制的に不生産的支出を累増させ、生産的労働者の生産する剰余労働の強取奪を遂行するのである。独占資本による独占的高利潤の運動は直接的生産過程における剰余労働の搾取を徹底的に進め、独占の支配力を通じ非独占部門の利潤を独占資本に有利に再分配することによつて追加的超過利潤をかくとくしようとするのであるが、それはいつて社会的剰余価値の総量をかえるものではなく、ただ分配をかえるものではないこと、すでにマルクスが明らかにしたとおりである。

不払労働の搾取・剰余価値率をたかめる方法は、労働時間を延長すること、労働強度を高めること、および労働の生産性を高めること、絶対的・相対的剰余価値の生産以外にはありえない。



したがって、独占資本主義の段階における剰余労働の搾取の諸方法は新しい管理技術と労働にかんするブルジョア科学の成果をとり入れ、それを相互に組みあわせた「科学的」な搾取、いわゆる「合理化」として徹底的におすすみられているのである。

テラーシステム、能率給、フォードシステム、時間外労働、三直交代制、スクラップアンドビルドといった搾取方法の展開は、このことをはっきりと示している。

独占的高利潤の追求と取得は、こうした直接的生産過程における体制的にくみ込まれた「合理化」の諸方法によつて行われるだけでなく、独占価格の設定というもつとも基本的な形態をはじめ、インフレーション・租税その他の国家的機構と機能をもつた全人民から追加的搾取を行い、植民地、従属国の人民にたいする植民地搾取がきわめて重要な位置を占めるのである。

このように、独占資本の運動は、一方では「合理化」による労働時間の延長と労働強化、資本主義生産の急速な発展による生産様式の変化をつづき、労働力の価値

5面中へつづく



5面中へつづく

ポーランド労働者の苦闘とわれわれの道(上)

最初の革命的な高揚と労働者階級の敗北

昨年八月、食肉・食糧不足に対する不満から始まったポーランド人民の大衆運動は、グダニク・レーニン造船所労働者の経済ストライキを契機として、またたく間に全ポーランドに波及し、いまや労働者階級を中核とし明確な社会革命の性格をおびてきている。ここにきて、ポーランド統一労働者党内の矛盾もさることながら、ポーランド人民を押し収めてきたソ連官僚独占ブルジョア階級との対立を決定的に深めてきているのである。

今年に入つて、「連帯」に結集する労働者階級は昨年の労働組合の政府からの独立、ストライキ権の確立等の政治的権利をテコとして第二波の闘いに突入している。いまま世界の労働者階級の熱い視線

歴史的激動を予感させるポーランド労働者決起

日共は「前衛」(八〇年十一月)でポーランド労働者の決起を社会主義体制下における民主主義的改革として支持し、弱々しくソ連軍事介入に対する反対の態度を示すだけである。この現代修正主義者の見解には、ポーランド人民の歴史的苦闘をどうにかえそうという態度など一片も見られない。むしろソ連「社会主義」に対するポーラ



ボズナニの民衆デモ——1956年

ポーランドに注がれている。ソ連現代修正主義者や、これに追随してきたポーランドの党官僚階級ブルジョア階級によって踏みつけられてきた社会主義、マルクス・レーニン主義の革命的復権を行うことができるかどうか、ここにポーランド人民の極めて重要な実践的課題がある。

第四インターナショナルは、「補正政治革命のはじまり」として評価し、国際的連帯活動の必要を強調している。この政治的態度の基礎をなす「補正第二次政治革命」の主張は基本的にポーランド国家の現状を「墮落した労働者国家」としている点にその特徴がある。そこから「反官僚革命」というポーランド労働者の政治方向

56年『ポーランドの十月』の政治的性格

一九五六年十月、ハンガリーの人民に決定的影響を与えたのはポーランド人民の闘争であった。『ポーランドの十月』とポーランド人民が呼称する五六年の闘いは、フルシチョフの「非スターリン化」と軌を一になら発している。(フルシチョフの「非スターリン化」は資本主義の全面的発展については、近日発行の「長征」第二号を参照されたい)

この「非スターリン化」と軌を一にしたポーランド人民の「パンと自由」という叫びはポーランド全土を席巻し、資金紛争に端を発したボズナニの暴動へと至りつた。このポーランド人民の大衆運動は、ボズナニ暴動のストロガンの「パンと自由」「共産主義をばれ」とともに「ロシア人くたばれ」という点に最大の特徴があるとみられる。(東欧の動乱「平凡社」)

官僚ブルジョアジーへの批判の不徹底性と苦悩

とくにポーランド人民が「パン」とともに「自由」を訴えねばならなかったのは、戦後人民民主主義独裁下の過程で、スターリン等の指導によって労働者階級の最小限綱領である言論・出版・集会・結社の自由を「プロ独」の名のもとに解体していることである。それ

4面下段からつづく

値・再生産費用をますます増大させざるを得ない。しかし、他方では労働者の個人的消費を最少限にとどめ、資金を事実上切り上げる諸作用をもたらさずにはおかない。したがって、このギャップは労働者の資金闘争によって回復されないかぎり、これを阻止することはできないのである。

それゆえ、独占資本主義段階における労働者階級の資金闘争は、独占部門と非独占部門との資金的不均衡等から、また生産と資本の急速な集積と技術「改

国独占と独占的高利潤のもたらすもの

プロレタリア階級独裁を樹立し、最初の社会主義革命を実現したロシア十月革命以降、帝国主義から社会主義への世界的過渡期、帝国主義とプロレタリア共産主義革命の時代への突入は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を急速に進めた。

この転化の過程は、第一次帝国主義戦争の時期に戦争の必要と結びついてヨーロッパの帝国主義にあらわれたが、一九一九年の世界資本主義の未曾有の大恐慌以降降格化し、第二次帝国主義戦争以降、

は、生産の社会的性格と所有の私的資本主義的形態との矛盾が最大限に激化し、資本主義を維持し、独占体的高利潤を維持するために、国家を、生産・流通・分配の過程に直接介入せざるを得ないほどはげしくなったこと。国家権力の介入なしには、もはや資本主義が機能しえなくなったこと、労働者階級に対する搾取と抑圧の機構を維持・再生産しえなくなったことを示している。当然のことながら、国家独占資本主義における国家の経済的機能は、独占体への搾取、労働者階級と勤労人民に対するあらゆる形態での搾取の強化をめぐり、人民の犠牲性において独占的高利潤を追求する独占体の蓄積欲望に奉仕し、その蓄積機構を補強することにあることはいままでもない。

この段階における労働者階級に対する強奪・強搾取は、独占資本が展開した直接的生産過程の労働強化・労働時間の延長、労働の生産性の追求は、さらに強固にされることも、労働者階級に対する追加的搾取が、租税の徴収、資金からの控除たる社会保険基金、公共料金および独占価格による搾取強化、インフレーションによる実質賃金の引き下げなどの諸形態をとり、複雑な国家独占資本主義の機構と機能を通じて、一連の社会改良政策とからみあひながら、最高度に強化されるのである。

このような敵対的矛盾の成熟は、労働者階級のより大規模な結集、統一的な労働運動、広汎な人民との統一行動の発展を促す客観的な条件を形成する。すなわち、国家独占資本主義は、資本主義の歴史発展の総過程において、その最高の段階であるとともに、最後の段階であること、死滅しつつある資本主義として社会主義革命の前夜にあることをはっきりと示しているのである。

しかし、独占資本は資本主義体制の死の延命をかけ、直接的生産過程における剰余労働の収奪を暴力的にすすめて、労働運動の社会主義と帝国主義の分裂を強化し、労働者階級の大規模な結集、階級の統一、統一戦線の結成をめざす革命勢力、先進的労働者の闘いにドス黒い攻撃をしかけてきている。

先進的労働者の任務は、資金闘争を中心とする労働者階級の闘いを、資金奴隷制の最後の廃止に向けた闘いとし、つかりと結びつけ、国家独占資本主義の強奪の攻撃の一つ一つが、死滅しつつある資本主義として、資本主義生産関係をなんとともに保持せんとするあがきであることを暴露し、独占によって労働者階級内部にもちこまれた競争と分裂、とりわけ、資本の手先労働者階級とも徹底的に対決し、労働運動の究極的目標「資金奴隷制の廃止」に向けた闘いへと突き進むことである。

労働者評議会運動に問われた革命的展望

この十月以降の過程は、ポーランド労働者、共産主義者にとって苦闘といえるものである。われわれが、今日のポーランド労働者決起にいたる過程で、注目すべきは労働者評議会運動のこうした敗北の問題である。なぜなら、明らかに労働者評議会運動が指導する革命的労働者が、いまだ充分な政治的綱領をプロレタリア革命の綱領として形成しえず、また官僚ブルジョアジー、小ブルジョアの一線を画した闘争を闘いとりながら、同時に革命的権力樹立

この十月以降の過程は、ポーランド労働者、共産主義者にとって苦闘といえるものである。われわれが、今日のポーランド労働者決起にいたる過程で、注目すべきは労働者評議会運動のこうした敗北の問題である。なぜなら、明らかに労働者評議会運動が指導する革命的労働者が、いまだ充分な政治的綱領をプロレタリア革命の綱領として形成しえず、また官僚ブルジョアジー、小ブルジョアの一線を画した闘争を闘いとりながら、同時に革命的権力樹立

日本農政の歴史

農地改革以降の農業政策と農民の状態

三里塚・農民

加瀬勉

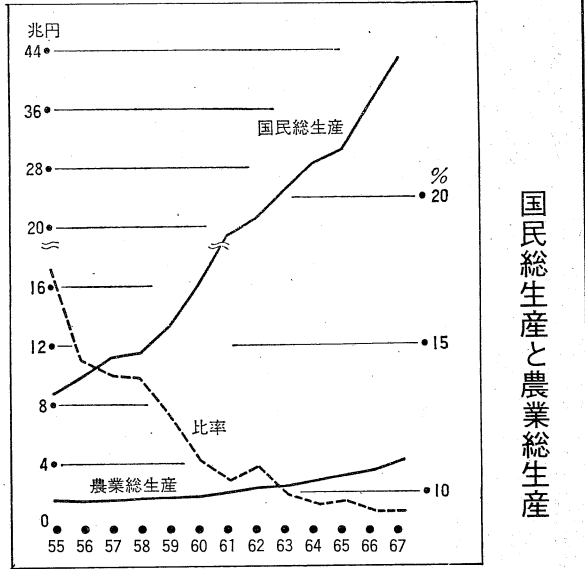
戦後日本農政の歴史は、日本帝国主義再確立の重要な基礎をなす部分といえるだろう。この歴史を、農業、農村にあって生きた加瀬勉氏の手になる本稿は、単なる政策史にとどまらず、国際関係や日本帝国主義の政治と経済、そして農民の経済状態から、精神史にいたるまでを貫いて明らかにした、戦後史の壮大さを伝えてあまりあるものと思う。

今回は、五〇年代の日本農政が、軍備と食糧をめぐる米帝国主義との従属と同盟の中で、大きく変貌するMSA協定と安上り農政の過程へとすすむ。

(文中小見出しは編集部)



一九五三年のMSA法改正によって、米国の過剰農産物を利用しての軍事援助が可能となり軍国主義の復活、再軍備への道のなかで農業・農民が犠牲をいちはやく受けることとなったのである。



を展開してきた三里塚地区、芝山町においてもこの政治的変化に対応できず、階級的農民運動は解体した。

(4) MSA協定と日本の再軍備

一九五四年は、戦後の農業、特

に食料政策の基本方向にきわめて

重大な転換の端緒が開かれ、歴史

的転回期として重大な年であった。

この年の三月、アメリカとのあ

いだにMSA協定(相互防衛援助

協定)およびこれに関する諸協定

が締結された。この一連のMSA

諸協定の調印は、わが国の防

衛政策、再軍備への道に決定的な

影響を与え、そればかりでなくわ

が国の経済政策、特に農業、食糧

政策に決定的な影響を与え、一九

五四年において作柄は平年作であ

たがなお三〇〇万トン食糧輸入が

必要であった。

政府農林省は食糧増産対策五ヶ

年計画、三〇〇〇万石の食糧増産

をはかる計画であった。それが一

九五三年農林省関係予算の推移は

一七〇億、五四年一八億、

五五年九六億、五六年七億

円とたつた四年のあいだに半分

もみない額に引き下げられてい

ったのである。

軍事予算

バターも大砲も

一九五三年の臨時国会で再軍備

論争が激しく展開され、そのなか

で「バターか、それとも大砲か」

(5) 「安上り農政の展開」と農基法農政へ

五〇年代後半に至って重化学工

業基軸の工業は高度成長に至り、

一七・八%の高率で伸びを示した

のに、農業生産は連続の大暴落に

もかわらず、また農業生産は平

常において一段階その水準を高め

たのに、年率ではせいぜい二・三

%前後にとどまり伸び率は停滞し

てはまかないえない状況が生れ、

農業者所得の増大をうまわる経営

費、生活費の増大によって農業だ

りひろくと、農業技術研究会(

宮野稔等)四Hクラブ(石井英祐

農協青年部木内武等)が、いわ

ゆる保温苗代に代表される農業

小型耕耘機等の中農技術体系)導

入の尖兵として活躍する。この諸

団体の運動と活動は、せまりくる

農業危機をもつばら農業技術、営

農改善の点から追求し、反戦平和

あるいは動議、警職法反対、農村

の民主化闘争等プロレタリアート

運動とならなくも保守の権力基盤

形成していった。

そうしてMSA農政によって北

総協作地帯の主要な作物であった

芝山町地区から、芝山町から

姿を消していくなかで、朝鮮戦争

の特需景況で発展した鉄鋼メーカ

川鉄が、平炉メーカから高炉メー

カをめざし世銀のバックアップを

以上にも達した。戦前は、あるい

は戦後膨大な失業・半失業人口を

かかこみ過剰人口の巨大なプー

ルで、特に深刻な一、二男をかか

えていた農村が、高度成長のなか

でそれを支える労働力の供給源と

なり大量の排出傾向に転じたので

あった。

その転じた先は臨時工であり、

日雇いであり、社外工・中小企業

が中心であり、農外流出の労働力

「階級的農民運動」

の解体

この時期、北総協作・水田地帯、

三里塚、芝山町の農業は飛躍的に

生産力をのびしたのであるが、こ

の生産力の発展は生計費と経営・

生産費の膨張、すなわち生産の発

展が機械資本を必要としたという

矛盾が交錯していたのが、農業が、

それも階級的農民運動がまったく

その経営が決定的な破局になる前



板付基地から朝鮮半島へ出撃する米軍機